

原発汚染水と「欠如モデル」

8日の衆院連合審査会で、西村経産相は福島原発の処理水を「汚染水」と呼ぶのは、「フェイク」にあたると。日本維新の会の足立康史氏の質問への答弁である。足立氏は「(汚染水と表現して)偽情報、フェイクを拡散している国会議員がいる。国会の中から偽情報を駆逐していく決意だ」と述べ、政府に全面協力する姿勢を示した(sankei.com)。さすが「第2自民党」の議員の質問だ。政府や東電の責任と対応に目を向けないのか。ここでは、朝日新聞7日夕刊の石井徹・編集委員「エコ&サイエンス」を紹介する。

東京電力福島第1原発の処理水が海に放出される1週間ほど前、米ニューヨーク州のホークル知事は、ニューヨーク市から40^{キロ}ほど離れた原発からの微量のトリチウムを含む排水を阻止する法案に署名した。

AP通信などによれば、ハドソン川沿いに50年前に建てられたインディアンポイント原発は、ニューヨーク市の4分の1にあたる電気を送ってきた。だが、福島第1原発の事故などをきっかけに2021年に閉鎖。ホルテックインターナショナル社によって廃炉作業が続けられている。

同社は、廃炉作業に伴い、放射性物質を含む130万ガロン(約500万^{リットル})の水を放出すると発表。これに対して、川沿いの住民らが反発した。民主党議員が提出した放出を禁止する法案が6月に州議会で承認され、知事裁定に委ねられていた。

同社は、トリチウムは自然界に存在し、原発からの排出は一般的と説明。その濃度は連邦基準をはるかに下回っており、健康や安全に問題はないと主張した。また、放出中止による数百人のレイオフ(一時解雇)の可能性にも言及した。だが、ホークル知事は「ハドソン川はニューヨーク州を代表する自然の宝であり、川を守るために私たちは団結することが重要だ」と排出にストップをかけた。

福島第1原発の処理水の海洋放出を進めてきた人たちからすれば、ニューヨーク州の状況も「非科学的」と映るのだろうか。科学を受け入れず、不信を抱くのは科学的知識の欠如が原因だ、とする考え方を「欠如モデル」と言う。科学的知識を増やせば、問題は解消するという考え方だ。しかし、欠如モデルがうまくいかないことは、科学コミュニケーションの世界ではよく知られている事実だ。

世界最悪レベルの原発事故を起こした東電は事故前、報道機関に対しても「欠如モデル」に基づく対応をしていたと思われる。私が原発に批判的な記事を書くと、東電から「ご説明したい」という連絡があり、担当者が本社を訪ねてきた。

今、欠けているのは、科学への信頼ではなく、国や東電に対する信頼ではないか。そもそも、科学的に正しいかどうかの前に、自分たちのことは自分たちで決められることが重要だ。それが自治であり、ニューヨーク州にあって、日本に欠けているように思う。

(2023年9月9日)